

西コンロン山脈ゲズ川流域の地質ひとこま

中国西域のシルクロードの町、カシュガルからおよそ100km南下すると西コンロン山脈の麓に辿り着く。西コンロン山脈はコングール山やムシタグ山など7,000mを越す峰々を抱く高山地帯であり、またアフガニスタンやパキスタンなどとの国境地帯でもある。ここはインド側からの大陸プレートの衝突を受けて隆起が続き、山岳氷河も標高3,000m付近にまで発達することから土石の排出が著しく盛んである。西コンロン山脈を横断するゲズ川に沿って様々な地質現象を垣間みることができる。〈地質調査所 水野 清秀・石井 武政〉



1. ゲズ川流域の主要な町ゲズは、何段にも見事に形成された河岸段丘の上にある。ゲズから上流にはまとまった集落はなく、この町には国境検問所が置かれている。



2. ゲズ近くの谷筋に見られるモレーン。モレーンは氷河が運び出した大きさも形態も不揃いの碎屑物から成る高まりであり、写真のモレーン背後に氷河が続いている。

3. ゲズよりパキスタンへと伸びる国際道路を上がっていく途中で観察される扇状地。草木のない山地から大量に流れ出る砂礫は見事な形の扇状地を作っている。





4. ゲズ川がやや開けたところは湿地状になり、寒冷地に特有な凍土に伴うハンモック構造が認められる。これは地面表層部が凍結と融解を繰り返すうちにできると考えられる。



5. 標高3,500m付近にあるカラクリ湖の水面にムシタグ山(7,546m)が映る。この辺り一帯はバミールと呼ばれる高山地帯で、「世界の屋根」の一角を占めている。



6. 砂層と礫層の互層(段丘構成層)を切る小断層。西コンロン山脈からカシュガルにかけての地域は構造運動が活発で、しばしば地震が起こっている。



7. 山越えの砂丘。モレーンや扇状地の堆積物は更に下流に運ばれ、同時に細かく砕かれていく。これらの行き着く先はタクラマカン砂漠であり、また微細な粒子は風により遠方へと吹送される。